

お弁当の思い出

わたしには、誰かに何かを渡す時に、手紙やメモをつける癖があることに最近気づいた。

誕生日のような特別なイベントではなくても、『これおいしかったからお裾分けです！』、『最近疲れてそうだけど大丈夫かな。これはよく眠れるお茶だよ』等々。

もはや手紙とよべない付箋紙のようなメモに書くこともしばしば、そして、手紙の中身も、ものを渡す時に口頭で伝えれば済むような内容であることも多いのだが、なぜか手紙をつけてしまうのだ。

ふと、わたしのこの癖はどこから来たのだろうと考えた時に、辿り着いたルーツが、母だった。

人生で一番手紙を多くもらった相手は母だと思う。

母からの手紙は、誕生日や入学式、卒業式のようなイベント時はもちろんだが、普段の日常のお弁当と共に入っていることが多かった。

例えば、テストの時。

『午前中はどうだった？午後からも頭回るようによく噛んで食べること！落ち着いてガンバレ！』

大学受験の時にも、緊張がなかなか取れなかった私は、お弁当そのもの以上に母からの手紙を心待ちにしていた。

『今まで頑張ってきたから絶対絶対ぜーったい大丈夫！自分を信じて！応援してるよ〜！』

ダイエットをしている時。

『ご飯はうすーく敷いときました。ママもダイエット頑張ります！』

失恋した時。

『こんなにかわいくて良い娘を手放すなんて見る目がない！そんな人のために流すあなたの貴重な涙がもったいない。笑って元気だしなさい。』

このメモがわたしを逆に泣かせたけれど、以降、誰かの言動に傷ついた時の、私の密やかなバイブルにもなっている。

これらの言葉たちは、決して、母が恥ずかしがり屋だからお弁当にメモをつけている、というわけではなく、いつも面と向かって言ってくれる言葉たちでもある。

それでも母は、お弁当に手紙をつけてくれていた。

母になぜ手紙をつけてくれていた理由を聞いたことはないけれど、今、母のように手紙をついついつけてしまうわたしなりの自論は、

あなたのことを大切に思っている人がここにいます、ということ伝えたい。いや、伝えたいというよりも、表したい、ということが心根にあるのではないか、と思う。

ここにいてからね、と、あくまでそっと見守るような感覚。

私は母が作ってくれた美味しいお弁当を食べながら、もらった言葉を反芻し、まじまじと読み返しては顔を綻ばせたり、うるうるしたり、そしてぎゅっと握りしめて、時にはお守りのようにポケットに忍ばせていた。

そして同時に、母がどんな気持ちでお弁当を作り詰めてくれたのか、忙しい中でこのメモを書いたのか、そういう想像力が呼び起こされて、毎度毎度胸がきゅっとなった。

私が大好物の卵焼きの数が多めな時は、私をきつと励ましてくれているのだなと気がつくようになった。

母のこのお弁当メモは、多感な時期の私に、自分の存在を尊重してくれる人がいる、大切にされている、という確かな安心感を与えてくれた。

一人で生きているわけではないということなんて頭では分かっているけれど、自分のことを思い、側で見守ってくれている人がいることには、意外と気づけない。

そして、気づけないまま、いとも簡単に孤独が蝕んでくることは社会人になって知った。

そんな日々に、手紙という、紙にその人の筆跡が、思いが表されていることが、安心感を与えて、心を救い、もうちょっとだけ頑張ってみようかなと思えるのだと、自分の経験から刷り込まれている。

だから、私も手紙をつい書いてしまうのだと思う。

わたしから誰かに贈る言葉は、母がかつてわたしにくれて今もなお励まし続けてくれている言葉がきつと多い。

大好きな甘い卵焼き、緑色の野菜のおひたし、夕飯の残りものでできた普通のお弁当は、添えられた母の手紙によって、より一層大切な思い出となり、そして想いを惜しまず言葉にして誰かへ伝えられる今の私へと繋がっている。